

「つなぎ保育」の実践と重要性

— 子ども一人ひとりの人生をつないでいくために —

松江赤十字乳児院 井上 友見

1. 「つなぎ保育」とは

筆者は現在、松江赤十字乳児院で「つなぎ保育」に取り組んでいる。以下、「つなぎ保育」の概要と意義について述べる。定義は「措置変更における「慣らし保育」を、アタッチメント対象の移行という視点から丁寧に行い、措置変更によるアタッチメント対象喪失のダメージを軽減し、喪失の前に新たなアタッチメント関係の形成を支援すること」となる。考案者は今川恵理子氏である。

当院では入所児に「担当（＝アタッチメント対象）」をつけ、日々の養育の中で愛着関係が築けるようにしている。少しずつ時間をかけて築かれていく入所児と担当職員との愛着関係は、今後の子どもの人生を支えていく基盤である。

2. なぜ「つなぎ保育」が必要なのか

措置変更は、子どもにとって生活が一変する出来事である（住み慣れた場所、家族のように共に過ごした入所児や、頼りにしている職員との別れ）。特に担当職員との別れは、これまで支えとしていた人との愛着関係が途切れてしまうことになり、大きな喪失体験となる。「つなぎ保育」は、措置変更前に新しい担当との愛着関係を築くための大切な支援である。

3. 「つなぎ保育」を開始する前に行ったこと

新しい取り組みを始めるにあたり、まずは関係機関の理解を得ることが必要だった。これまでよりも密な連携が求められるため、今川氏を迎えて合同研修会を開いたり、外部会議にて説明を行い、「つなぎ保育」を知ってもらうことから始めた。

4. 「つなぎ保育」の流れ

プロセスは以下の通りである。

- ①措置変更先の決定、②施設職員や里親による乳児院訪問、③つなぎ保育実施、④退所までのかかわり、⑤退所後の支援、の五段階である。

5. 事例紹介（A児、1歳1ヶ月で里親委託）

生後9ヶ月で「つなぎ保育」開始。里親は実子がおらず、養育経験なし。そのため、交流時には担当職員が中心となりフォローした。里母がほぼ毎日面会し、A児との安定した愛着関係の構築を目指した。里父は就労していたため、勤務を調整しながら交流を続けた。

面会終了時には、その日の様子や感想、里親の要望等を確認する交流シートを用意し、その都度記入してもらった。シートは他の職員も確認し、里親と乳児院が円滑にコミュニケーションを取れるようにした。

交流状況を見ながら、外出、乳児院での宿泊体験、里親宅への外泊とステップを進めた。なお、支援の評価は、里親、児童相談所、乳児院でステップを進めるごとに実施した。交流は順調に進み、1歳1ヶ月で委託となった。

委託後は、児童相談所と共に家庭訪問を実施し、在宅での養育を見守った。里親だけで養育するにあたり、不安が多くあったため、訪問時にアドバイスを続けた。特別養子縁組成立を機に一旦のケース終了となったが、本家庭は松江市内在住であるため、現在も乳児院との交流が続いている。

6. 「つなぎ保育」の成果と課題

成果としては、以前よりも措置変更前の支援に時間をかけることができるようになった。子どものペースに合わせて進められるようになり、子ども自身の安心につながった。また、職員だけでなく、入所児同士での別れがより理解できるようになった。時間をかけて説明することができるようになり、大人も子どもも気持ちの整理をつける余裕が持てるようになった。また、施設や里親と支援についての協議を繰り返すことで、以前よりも関係が深化した。「乳児院で大切に育ててもらった思いを引き継いで、今度はこちらがしっかりと見守っていく」、「最初はどうかのだろうと思っていたが、つなぎをやって良かった」と言ってもらえるようになった。

課題としては、施設の空き状況や受け入れ体制、里親の家庭事情等のために、思うように支援が進まないことがある。また、子ども自身の体調不良の場合もある。できる限り子どものペースで支援したいと思う反面、最終的には大人の判断で進めてしまう面もあり、今後さらに関係機関との連携が必要と感じる。

【キーワード：乳児院、つなぎ保育、措置変更、アタッチメント、里親】